高島屋史料館 TOKYO 企画展 Vol.3「デパート卓球」
セミナー 4

女木島トークセッション

原倫太郎＋原游、中里繪魯洲、宮永愛子、長谷川仁、山下麻衣＋小林直人

［日時］2019 年 9 月 14 日 (土) 14:00 ～ 16:00
［会場］高島屋史料館 TOKYO 5 階旧貴賓室

『デパート卓球』開催中は、日本橋高島屋の卓球会場と、瀬戸内・女木島の卓球会場がネットでリアルタイムに結ばれていました。この女木島は瀬戸内芸術祭の会場のひとつ。卓球台を含め、作品群が軒を連ねる『小さなお店プロジェクト』が開催された島です。このプロジェクトに参加した 5 組 7 名のアーティストが日本橋に集合。現代作家が芸術祭展示の舞台裏を語ります。

原 倫太郎（はら りんたろう）／アーティスト
原 游（はら ゆう）／アーティスト
＊お二人の詳細なプロフィールは、セミナー 2「相互扶助システムとして」セミナーレポートに掲載しております。

原倫太郎＋原游として、『大地の芸術祭 越後妻有 トリエンナーレ』（新潟、2012・2015 年）、『北アルプス国際芸術祭』（長野、2017 年）、『瀬戸内国際芸術祭』（女木島／香川、2019 年）、『水あそび博覧会』（越後妻有里山現代美術館／新潟）などに参加。第 11 回文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門奨励賞を受賞。

中里 繪魯洲（なかざと えろす）／アーティスト
1954 年東京都生まれ。1973 年の日本放浪、1978-79 年の西南アジア放浪を経て、1979 年より静岡県南伊豆町大瀬に居住。1985 年、東京都立川市で Rasen studio を主催。独創的な空間アートで、見るものを圧倒する作品を制作している。過去に、市川猿之助スーパー歌舞伎で美術小道具を、吉田勘緑人形浄瑠璃で舞台美術を担当した。主な個展に、『天の馬　地の馬』（福島県矢吹町大池公園、1992 年）、『さみしい天来望遠鏡のおとうとよ　マリアの心臓』（東京都渋谷区、2010 年）、『隅』（福果・神保町、2014 年）などがある。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

宮永 愛子（みやながあいこ）／アーティスト
1974 年京都府生まれ。1999 年に京都造形芸術大学美術学部彫刻コースを卒業後、東京藝術大学に進学。2008 年に同大学美術学部先端芸術表現専攻修士課程修了。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩、陶器の貫入音や葉脈を使ったインスタレーションなど、気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。近年の個展に、『みちかけの透き間』（大原美術館有隣荘、2017 年）、『life』（ミヅマアートギャラリー、2018 年）、『ヘアサロン壽』（女木島／香川、2019 年）、『宮永愛子：漕法』（高松市美術館、2019 年）など。主な受賞に、京都府京都美術工芸新鋭選抜展優秀賞（2004 年）、第 3 回 shiseido art egg 賞（2009 年）、第 28 回タカシマヤ美術賞（2017 年）、第 70 回芸術選奨文部科学大臣新人賞（2020 年）、第 33 回京都美術文化賞（2020 年）など。

長谷川仁（はせがわ じん）／アーティスト
1972 年北海道生まれ。立命館大学産業社会学部人間文化コース卒業、桑沢デザイン研究所プロダクトデザイン科卒業。社会学、プロダクトデザインを学んだ後アーティストとして活動を始める。小さな自然の中に大切な力、不思議な力があることを、ワークショップをはじめ、絵やオブジェなど様々な媒体を通して表現発信する。公の場でのプロジェクトが多く、学校、病院、オフィス、集合住宅、交通機関など様々な場所で展開している。主なプロジェクトに、『coins』（JR Tower Art Competition、2003 年）、『百色の森（ももいろのもり）』（大空こどもクリニック、2009 年）、『猪おどし／ Shishi-Odoshi』（瀬戸内国際芸術祭、2016 年）など。

山下 麻衣（やましたまい）／アーティスト
1976 年千葉県生まれ。2001 年に東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻を卒業後、2004 年に東京藝術大学大学院美術研究科修士課程油画専攻修了。2005-6 年にはベルリン芸術大学スタン・ダグラスクラスに研究生として所属。2009 年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程油画研究領域 修了。

小林 直人（こばやしなおと）／アーティスト
1974 年千葉県生まれ。1999 年に筑波大学芸術専門学群洋画コースを卒業後、2002 年に東京藝術大学大学院美術研究科修士課程油画専攻修了。2005-06 年にはベルリン芸術大学スタン・ダグラスクラスに研究生として所属。

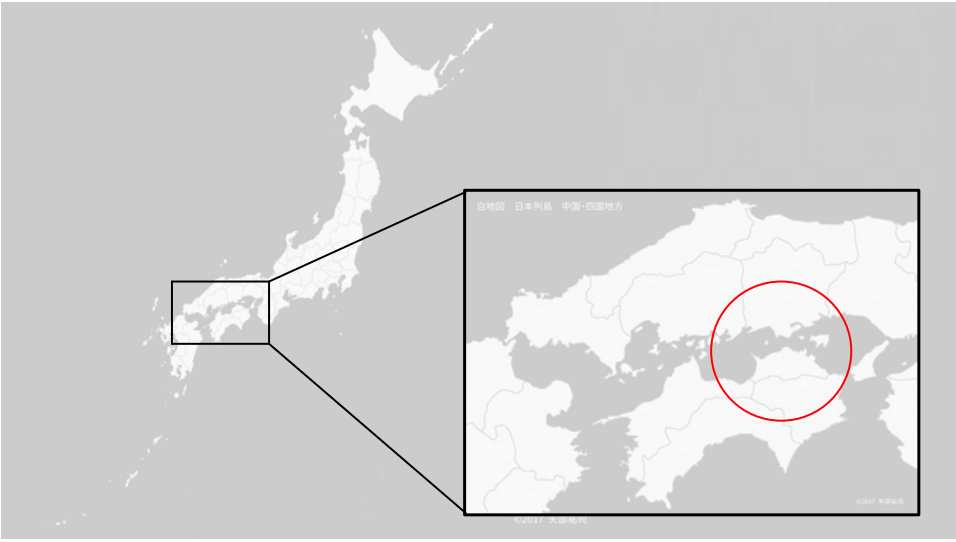
山下麻衣＋小林直人は、高校時代に出会い、2001 年から公式にユニットとしての活動をはじめる。ともに東京藝術大学大学院を修了し、2004 年にドイツに渡り、ベルリンを拠点に世界各地で滞在制作、作品発表を展開。現在は千葉を拠点に活動している。近年の個展に、『自然観察』（タクロウソメヤコンテンポラリーアート、2018 年）、『ノートとノートの中』（小山市立車屋美術館、2015 年）、『infinity』（RL Window, ライアン・リー・ギャラリー、2014 年）、『A Dog and Wooden Sculptures』（Asifakeil, MuseumsQuartier、2014 年）など。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

様々な歴史を内包する瀬戸内海

山本朔太郎（以下、山本）｜アートフロントギャラリーの山本朔太郎と申します。アートフロントギャラリーでは、北川フラムを代表として、アーティストの作品制作のお手伝いをさせていただいています。今回、私は春会期の直前までこちらの作家の方々のお手伝いをしていました。

瀬戸内国際芸術祭は、瀬戸内海の 12 の島とその周辺の場所、東西に 450km という広い地域で行っている芸術祭です。最近は芸術祭ブームというのもあって注目を集めていて、『ナショナル・ジオグラフィック・トラベラー』で今年行くべき場所第 1 位に選ばれたり、ニューヨークタイムズでも今年行くべき場所第 7 位になったりしています。東京から電車で 5 時間半かかる、都心から離れた場所ですが、国内外から注目を集めている芸術祭です。2010 年から 3 年に一度開催しています。



瀬戸内国際芸術祭の開催エリア［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］

山本｜瀬戸内海は「内海」といわれ、周りが陸地に囲まれた独特の美しさがあります。古くから貿易路、航路として栄え、戦後は工場地帯として発展していった場所です。しかし、犬島の大きな製錬所で汚染の問題が起こったり、大島にハンセン病の患者を隔離するための療養所がつくられたり、豊島では産業廃棄物の投棄が問題になったりと、近代化の過程で都会の発展のしわ寄せを受けた、負の歴史も色濃く残る場所です。ここを舞台にして行われているのが瀬戸内国際芸術祭です。

1. 犬島精錬所
2. 大島国立療養所
すべて［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

地域がつくり上げる芸術祭

山本｜大きなテーマとして「海の復権」を掲げていて、アート・建築、民俗・生活、交流、世界の叡智が集う、次代を担う若者や子どもたちへ、縁をつくる、という６つの小テーマをもとに活動しています。

作品を少し紹介します。たとえば直島には、地中美術館などの大きな建築作品から､町中でもみるようなパブリックアートまで様々なタイプの作品があります。小豆島にあるチェ・ジョンファさんの〈太陽の贈り物〉という作品は、小豆島が国内随一のオリーブの生産地ということで､オリーブの葉をもとにした作品です。沙弥島に設置されている五十嵐靖晃さんの〈そらあみ〉という作品では、島の漁師さんが用いる網を編む方法で、島の方々に作品を一緒につくってもらっています。こうした住民の方々に参加してもらう規模の大きな作品も展示しています。少し変わり種になりますと、豊島にある〈島キッチン〉という作品では、安部良さんが設計した場所でレストランを運営しています。来た方に料理を食べていただくというだけではなく、交流の場所としても使っていて、月に一度、「島のお誕生会」と題してその月に誕生日がある方を集めて一緒にお祝いをしています。島の方々や鑑賞者に参加・体験をしていただくことを積極的に行っています。

1. そらあみ制作ワークショップ
2. 島のお誕生会
すべて［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

山本｜大事なのが、ボランティアサポーターの存在です。作品の制作補助や受付など、芸術祭を運営するのは大変人手がいる作業で、有志のボランティアのサポーターの方が沢山いらっしゃいます。国内だけでなく、国外からもボランティアをするために来てくださる方もいらっしゃいます。こういう方々のサポートも、国外での知名度向上につながっています。

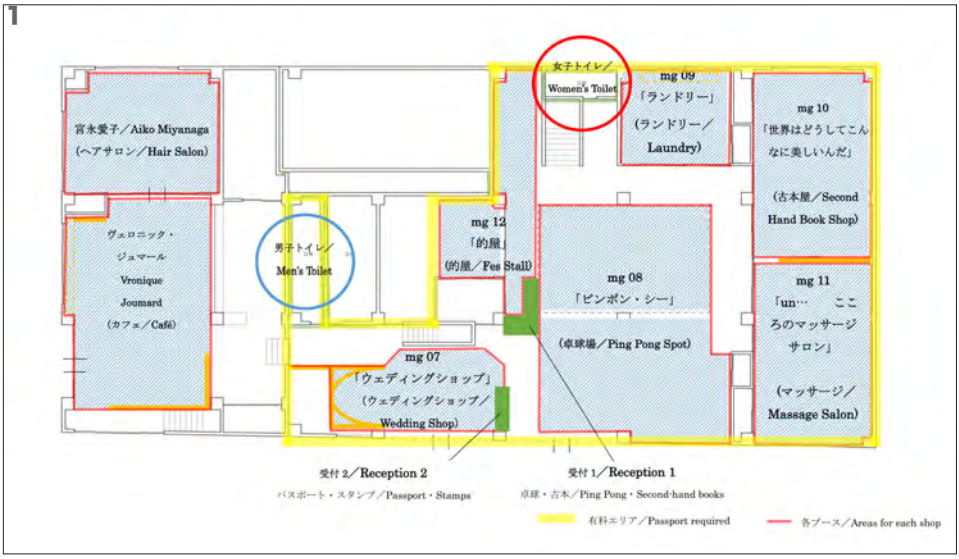
今回、瀬戸内芸術祭の会場の 1 つとなっている女木島で原さんたちに作品をつくっていただき、その作品の派生というかたちで高島屋でも同じタイプの作品を出展しています。女木島は高松から近く、フェリーで 20 分程度の島です。高松に住んでいる方には、海水浴場などのレジャースポットとして親しまれています。離島という環境で、高齢化や過疎化など、島特有の問題を抱えている場所でもあります。以前から、少し古めかしい映画館のような作品があったり、レストランをしている作品があったりと、女木島には既に作品としての機能と、お店などほかの機能の両方をもち合わせた作品がいくつかありました。そうした流れから、今年、何か新しいことをしようというときに、大きい建物をまるごと使って作家の方々に、お店としての機能をもった作品をそれぞれつくっていただくという企画が始まりました。当初は、女木島のショッピングモールということで「女木モール」と呼ばれていたのですが、最終的に『小さなお店プロジェクト』という名前になりました。大変好評で、たとえば［MATCHA］という web サイトにおいて春の時点では、新作で一番人気があると取り上げられました。

1. 女木島名画座上映会
2. レアンドロ・レルリッヒ〈不在の存在〉［写真：Nakamura Osamu］
すべて［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］

山本｜いくつか実際に制作された作品を紹介します。 1 つ目が、レアンドロ・エルリッヒというアルゼンチンの作家がつくった〈ランドリー〉です。右側にあるのは作家がつくった作品。洗濯機は実は偽物で、中では洗濯物が回っている映像が流れています。左側には洗濯機と乾燥機の実物があります。作品と、実際に使える機能の両方をもった作品です。

ヴェロニク・ジュマールというフランスの作家は、カフェをつくりました。一見普通のカフェですが、特殊な素材を机や壁に使っていて、手を置いたり、光を遮ったりすると、温度と光に反応して自分の手形や自分の影が残ります。自分が過ごした時間が模様として記録される、不思議なカフェになっています。
香港の「赤い糸」というチームは、結婚相談所をつくりました。麻雀やお茶のセットがおいてあるように、彼らが表現したのは香港の伝統的な結婚式で、実際にそこで縁結びを応援する、実際に相手を探すイベントを行って、来た人に新しい出会いを探していただくという作品になっています。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.



1.『小さなお店プロジェクト』のマップ
2. レアンドロ・エルリッヒ〈ランドリー〉［写真：Kioku Keizo］
3. リョン・カータイ＋赤い糸〈ウエディング・ショップ〉
すべて［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］

山本｜ここからが今回お集り頂いた作家の方々の作品です。簡単に説明します。原 倫太郎さん、原 游さんがつくったのは卓球場です。中里繪魯洲さんの作品はマッサージサロンです。中里さんがつくったマッサージチェアの反対側に実物のマッサージチェアをおいて、作品と通常のマッサージチェアの両方を体感していただけます。長谷川仁さんの作品は的屋です。仁さんのアートのなかで、島で捕れたタコを使ったたこ焼きや、女木島の海岸で拾ってきた石や貝でできたお守り、夏季限定でかき氷の販売などを行っています。宮永愛子さんの作品はヘアサロンです。目の前に鏡ではなく大きな窓があって、そこから女木の海岸が一望できます。予約は出来ないのですが、もしチャンスがあれば、実際にぜひ髪を切ってみてください。山下麻衣さん、小林直人さんの作品は、芸術祭のなかの高松のレンタサイクルに関連する展示と、古本屋です。レンタサイクルと古本屋の組み合わせは不思議に思われるかもしれませんが、説明を楽しみにしていてください。

秋会期が 9 月 28 日から始まり、説明したすべての作品を見ていただけますのでぜひお越し下さい。それでは作家の方々に今までつくってきた作品と、今回女木島でつくった作品の説明をしていただきます。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

人の「内」、呼応する「音」

中里繪魯洲

私は東京生まれで、若い時はぶらぶら放浪していました。元々舞台関係の小道具や美術の仕事をやっていて、30 歳くらいから鉄を中心に色々な素材を使って自分の作品をつくるようになりました。
十日町の田島征三さんの［絵本と木の実の美術館］で展示をやったときの、〈グリーンマン〉です。風見とヤジロベエを組み合わせた仕組みになっています。屋外にあって、この緑色の人型は、全て苔でできています。金属と植物に興味があって、そのなかでも身近にある苔を使いました。半年の展示会期中、植物を生かしておくために定期的に放水すると、シャワーを浴びているように見えます。できてから半年くらい経つと、苔についていたのか飛んで来たのか、種から色々な草が生えてきて、小鳥が飛んできたり、蜘蛛の巣をはったりと、かなりかたちが変わりました。この作品に関連するものが女木島でも展示されています。
〈玉座の空言〉は、後の女木島での作品につながっています。椅子に座って、右側にあるハンドルを回すと、色々な音が鳴って体に振動してくるという仕組みです。〈そうぞうしい椅子もしくはファシストの椅子〉は、女木島の後に最近制作しました。座って自分でハンドルを回すと音が出て、振動します。実際に座ってもらうと、身体と音とのつながりが実感できます。この根元の部分は、石などのいろいろなものがつながってできています。〈チャンプル マシーン〉は、ハンドルを回すと動いて音が出ます。これは 30 年くらい前に自分が彫刻的なものを初めてつくった作品で、初の個展で展示しました。タイトルの「チャンプル」は、沖縄のゴーヤチャンプルのように、混ぜていろんなものを加えたもの、という言葉ですが、そういう状態への興味は今でも続いています。チャンプルというのは「雑」、雑草とか雑誌とかいろいろなものが混ざった状態を指して、通常は否定的な感じで使われますが、自分の場合はその状態を肯定し、こだわっています。作品で出る音もいわゆる楽器の音ではなくて、モノとモノがぶつかって発生する音を意識しています。雑多な素材のなかに、物質としての豊かな条件を見出しています。

1.〈グリーンマン〉2016 年
2.〈そうぞうしい椅子もしくはファシストの椅子〉2019 年

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

〈ゆく玉くる玉〉は、2009 年に十日町で開催された妻有トリエンナーレで出した作品です。黒倉集落というところにある築百数十年の茅葺き屋根の民家の中を、透明なガラスの玉がさかさまに景色を映しながら転がっていきます。玉を動かした人がガラスの玉と同じ気持ちになって、この古民家の中を巡っていくようなイメージでつくりました。最初に玉を持ち上げて落とすだけで、あとは勾配で自然に 100m くらい建物の中と外を転がっていきます。八海山が見えてとても良い景色の場所です。一分ほどで元の場所に戻ってきて終わります。会期中カウントしたら、この玉はおよそ 200㎞の距離を走ったことになりました。〈音遊ブランコ〉は、絵本と木の美術館に設置されています。使われなくなったブランコを改造して、ブランコを漕ぐと頭上で音が鳴る仕組みになっています。

女木島での小さなお店プロジェクト、〈こころのマッサージサロン〉は、自分でつくったほうを「こころのマッサージチェア」、もう片方の既製品の電動のチェアを「からだのマッサージチェア」として対峙するように置きました。音と振動、視覚的なもので心をマッサージするというコンセプトで、水の波紋が光で壁に投影されます。なかにはこの波紋の映像が自分の心のなかですかと聞く人がいて、そうかもしれませんと答えました。心ということに強く反応する人や、待っていましたと言わんばかりに何度もやる人など、少し心が病んでいる人が多いのかなという気がして、私自身「心」というテーマについて改めて考えられました。外から見るのと、実際に座るのでは音の伝わり方が違うので、ぜひ体感していただけると嬉しいです。

最後は『小さなお店プロジェクト』の外に展示されている〈風の番人〉という作品です。さきの苔でつくったものとスタイルは一緒です。女木島の浜の風がすごくいいのです。すぐ目の前をフェリーが往来して、左へ行くのが男木島、右へ行くのが高松へのコースになっています。8 月のお祭りの時は数百人くらいのすごい人でした。奇祭に近い、特別な珍しいお祭りでした。ぜひ椅子を体感していただけると嬉しいです。

〈風の番人〉1992 年

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

映像の奥に、新たな光景を提示する

山下麻衣＋小林直人

山下麻衣（以下、山下）｜こんにちは。山下麻衣と小林直人です。いつも 2 人で制作しているアーティストユニットです。ビデオインスタレーションというかたちでつくることが多く、今回もそうしたかたちで出しています。

小林直人（以下、小林）｜高校で出会ったころから 2 人一緒にやっていまして、以前はドイツやアメリカの、アーティストインレジデンスというアーティストが滞在できる施設で活動していました。帰国して現在は千葉にいます。

山下｜今までの作品を 3 点ほどお見せしてから、今回の瀬戸内芸術祭の作品をご紹介します。まず、〈infinity〉というビデオ作品です。本来は約 5 分の作品ですが、短く 1 分ほどにしてあります。

小林｜走って道をつくっています。人が歩けば道ができるといいますが、それは実際にできるのかと。結果は 5 日間で道ができました。道はタイトルの通り、無限大のかたちで、走り続けられるように、という思いをこめています。

山下｜これを製作したのはスイスのアーティストインレジデンスに 1 年間滞在した時で、写真を何万枚か忘れてしまいましたが上から撮り続けて、パラパラ漫画のように全部つなげて映像にしている作品です。このように私たちは、ビデオを使いながら、自分たちの体でパフォーマンスする作品が多く、今回女木島に出しているのもそうです。

次に紹介するのは〈Dogsled〉、日本語でいうと「犬ぞり」という作品です。これはベルリンにいたときに撮影して、23 台のラジコンカーにフェイクファーをつけて犬を模して、それを私が極寒のなか引かせています。1 つのコントローラーで全ての犬を動かしているのですが、くねくね曲がってしまいます。

小林｜実際にはまっすぐにしか動かしていないのですが、それぞれ路面で曲がってしまって、なかなか思ったように進まない。最終的にバッテリーがなくなるまで走り続けました。

実はこの作品は南極物語にインスピレーションを得ていて、犬をコントロールしているのか、犬にコントロールされているのかわからない「犬ぞり」という微妙な関係性に興味を持って始めました。

山下｜展示では、ビデオと犬ぞりを一緒に展示しました。こうしたインスタレーションの形態もよくとります。

小林｜次は〈A Spoon Made From The Land（大地からつくった一本のスプーン）〉というタイトルの作品です。これもすごく労力がかかるプロジェクトで、普段使っているスプーンが、どうやってできるのかということを自分たちの手でなぞっていきます。小学校のときに磁石で集めたように、砂鉄をまず海岸で集めるところからスタートします。スプーン一本つくるだけでも、無駄が出るのでおよそバケツ

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

二杯分くらい必要でした。
　ここの砂浜は黒く、砂鉄が多いところで、昔はたたら製鉄で刀などをつくる鉄を採取していたそうです。

山下｜たたら製鉄の工程をなぞって、砂鉄を高熱で溶かしていきます。

小林｜砂鉄というのは酸化鉄なので、酸素を取り除く必要があり、そのやり方が特殊で試行錯誤して、ようやくできました。

山下｜最終的にこの一本のスプーンを地面からつくり、展示ではその過程のドキュメンテーションと、砂山の上に完成したスプーンを立てました。これは横浜トリエンナーレに出品しました。
　今回、女木島のほうで出品しているのが〈世界はどうしてこんなに美しいんだ〉という作品です。空間の半分がビデオインスタレーションです。ビデオと作品に使われている自転車が展示されています。映像のなかでも文字がみえますが、車輪にホイールライトというのを取り付けていて、それが回転することで残像効果によって「世界はどうしてこんなに美しいんだ」という文字が浮かび上がります。この言葉はアウシュビッツの強制収容所の記録である『夜と霧 ̶̶ ドイツ強制収容所の体験記録』（V.E. フランクル著・池田香代子訳、みすず書房、2002 年）からいただいています。本に絡んだ作品ということで、空間のもう半分には実際の古本屋さんに入っていただきました。高松に「なタ書」という予約制の、変わった本が沢山揃っている個性的な古本屋さんがありまして、展示空間のなかに女木島支店というかたちで入ってもらって、インスタレーションのなかに本屋さんがあるという展示になっています。実際に本は購入できます。

小林｜全体でみると、本と自転車と映像と、３つがつながっています。

〈世界はどうしてこんなに美しいんだ〉2019 年

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

山下｜映像は 15 分間ワンテイク、長回しカットなしで撮影しています。自転車と車が並走した状態で撮影しました。
『夜と霧』のなかで「世界はどうしてこんなに美しいんだ」という台詞は、アウシュビッツ強制収容所の囚人の言葉として出てきます。明日をも知れぬ囚人が夕日をみた瞬間に思わず口走った言葉です。それで、瀬戸内の夕日をバックに自転車でその言葉を灯しながら走る、というものが撮りたくて、撮影は女木島ではなく小豆島で行いました。女木島や高松などいろいろとロケハンしましたが、夕日をバックにできる西側の海岸沿いの道で、ある程度距離がとれるというところが小豆島しか見つけられなかったのです。

小林｜この映像を撮るためには、まず天気がよくて、かつ夕日が沈むときでなくてはいけないので一日ほぼ一度しかチャンスがなく、なんとか撮ることができました。

山下｜何日か小豆島に滞在したなかで 1 回だけ奇跡的に成功しました。

小林｜この作品を思いついたきっかけは、犬を毎朝散歩していると、なんてことない時に木漏れ日がきれいだな、とか世界の美しさを一瞬感じる時があって、その気持ちそのままをただ作品にできないのかと思ったことです。それからこの囚人の言葉に、平和に暮らしている私たちとその重みはまったく違いながらもシンパシーを感じて、きれいな風景にそのまま美しいという言葉を重ねて表現しています。

山下｜鑑賞者が世界の美しさということに思いを馳せられるような空間にしようと思い、展示空間では 15 分間の映像を椅子に座って鑑賞できるようにしています。女木島でのインスタレーションに関連して、高松港の近くのインフォメーションセンターでレンタサイクルもやっています。
夕方 5 時半から 7 時半の 2 時間限定で、かつ 5 台限定なのですが、作品のなかで使われていた自転車を貸し出しています。言語が 5 言語ありまして、全て「世界はどうしてこんなに美しいんだ」というのがホイールライトで出ます。そのプロモーションの映像を最後にお見せします。

小林｜乗っていただくと分かりますが自分は見えない作品です。作品の一部にはなるのですが、周りの人にしか見えません。

山下｜この本は世界中の言語に訳されているので、原文のドイツ語と、日本語・英語・中国語・韓国語訳の「世界はどうしてこんなに美しいんだ」という部分をそのままもってきています。秋会期も貸し出しておりますのでぜひ体験していただければと思います。また、東京の天王洲の寺田アートコンプレックスというギャラリーで、10 月 5 日まで、違うプロジェクトですが、同じくホイールライトを使った自転車の作品を展示しています。

山本｜ちなみに天王洲の展示の自転車は購入できるそうです。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

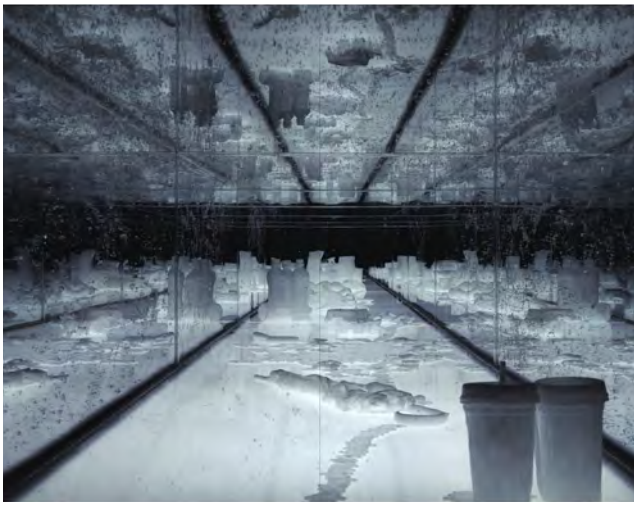
高松港近く、インフォメーションセンターのレンタサイクル

変わり続ける世界の瞬間を切り取る

宮永愛子

よろしくお願いします。女木島ではヘアサロンをやっています。まずは私がこれまでどういう作品をつくってきたのかをご紹介します。

〈なかそら ―透き間―〉は、2011 年に国立国際美術館で展示した、幅が 70cm、中身が 18m くらいある作品です。中に入っているのは、日用品と沢山のパズルです。パズルが一列に 18m 続いていて、全ての彫刻が防虫剤などに使われているナフタリンという素材でできています。この素材は、大学生のころ、衣替えのときに出会いました。防虫剤の小さな袋を入れて半年ほど経つと袋の中身がなくなっているのをみて、その中身はどこにいってしまったのか、その物質でつくるともしかしたら消えてなくなる彫刻がつくれるのではないかと調べて、研究を重ねました。彫刻と聞いてみなさんがイメージするのは石彫や木彫など、カービングして彫っていく、もしくは粘土で盛り付けてつくっていくということだと思いますが、そうではなく変化して、消えてなくなっていく彫刻というのがものすごくおもしろく私の目に映りました。



〈なかそら ―透き間―〉2012 年 ©MIYANAGA Aiko［写真：TOYONAGA Seiji］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

初めて室内で沢山の人がいる環境のなかで展示する時に、においが気になり、ランプのシェードのようにしたら光を透過してきれいかなと思って作品をケースで覆いました。すると次の日、ケースに結晶が出ていたのです。つまり自分が消えてなくなっていたと思っていた素材は、ケースをつけて空気を限定してあげると実は消えずに、ただ結晶になって変化しているだけなのだということに気が付きました。1999 年にこの素材を使い出してから、しばらく経って初めて気づいたのです。思い返してみると、結局いま地球にある全部のものというのは全部組み替えて、たまたまタイミングが合ってこういう状態になっている。明日は同じ状態にはなってはいないかもしれない、つまり世界は変わりながらあり続けているのではないかということを思いました。作品は儚く消えていくと思われがちですが、質量保存の法則のように、ただうさぎの彫刻だったものが結晶に変わっているだけで、変わりながらあり続けている、同じように世界はいつも変化している、ちょうどよいバランスをもって変わり続けているのではないか、というのが私のテーマになっています。

新聞などでよく「消えてなくなる彫刻」といったように書いていただきますが、私としてはその結晶のほうにも気が付いてほしいと思っています。でも作品というのは見る人によって感じ方はみな違うのだと思います。たとえばこの作品で彫刻の傘やカップを見ている人には消えてなくなる作品に見えますし、もう少し俯瞰して全体を見ている人にとっては、消えるのではなく結晶に変わっていく、常に変わり続ける作品に見えます。見る方の視点が変わると、作品の見方も変わってくる作品です。ナフタリンの作品は自分の名前をインターネットで検索して一番に出てくる代表的な作品になっていて、素材が変化していくというのは見る人にとっても興味深く思われて、よく取り上げていただいているのだと思います。変化していって儚い、ということはただ弱々しいことなのかというと、私の理解のなかでは、変化することができる柔軟さ、強さがあると思っています。世界にはそういうしなやかさがあるのではないかという思いがあります。

同じナフタリンの彫刻を、別のやり方で試してみたいと思ったのが〈waiting for awakening -chair-〉です。こちらは等身大のナフタリンの椅子が透明な樹脂に覆われていて、重さが 500kg近くあります。最初にナフタリンの椅子の彫刻をつくって、椅子を寝かせ、そこに透明な樹脂を一層ずつ流していきました。タイトルの通り、樹脂と一緒に椅子がいまは眠りについて寝覚めを待っているのです。実は椅子の足元のところに空気の通り道があって、つくった日の最後に蓋（シール）をしています。この蓋をはがすと、ここから空気が入っていって、だんだんナフタリンの白い彫刻が抜け殻の不在の彫刻に変わっていきます。つまり作品の持ち主が次の時間を選べるということで、作品に参加し、その作品の行く末を生活のなかで眺めることができるという作品です。

〈waiting for awakening -chair-〉2012 年 ©MIYANAGA Aiko［写真：TOYONAGA Seiji］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

他の作品では川から塩を採取したり、葉脈を何万枚もつないで立体作品をつくったり、使う素材はナフタリンだけでなく様々なのですが、変わっていくものがどうやって存在しているのか、世界がどういうふうにあり続けているのかというのを観察し、俯瞰して考えることが好きです。

そんな私にフラムさんから「宮永さん、お店やってほしいんだけど」とお話がきました。私の作品を知っている人は不思議に思われるかもしれません。私自身も、お店（?）と自分がどんな風に参加したらいいのかかなり悩みました。利用した人が参加して作品ができあがるような立体物の提案をしたところ、100 人しか住んでいない島で、住んでいる人が楽しめるもっと具体的なお店を、と言われました。どういうものが島の生活のなかで必要なのか考えてみてほしいという提案を受けて、まず私が思いついたのは海を見ながら入ることのできるお風呂です。私がお風呂好きというのもあって、お風呂に入るってほっとするし、自分が清められた感もあるし、一人の時間っていいなと思いました。島の方々も高齢になるとお風呂を入れるのが大変で、何かが壊れると修理するのも厳しいというのもありました。しかし公衆衛生法などルールが厳しくて……。

次の案が出なくて歩いていると、たまたま島に髪をカットに来ている 60 歳の玉木さんという女性にお会いしました。高松市で経営していた美容院を息子さんの代に譲った後、美容院がない島の人々のためにカットの出張にきている方でした。カットする建物の前には来月〇〇、10 時から 15 時までいます、と書いてあり、それだけで通じ合える島のコミュニティが既にあったのです。お客さんが最近の出来事を話しながら髪をカットしてもらっているシーンを見て、私がお店をやるといっても、なにかここで新しいお店を開くことはないなと思いました。もしできることならば一緒にヘアサロンをやってみたいな、と思い、「この島はやっぱり海が一番美しいと思うし、海が見えるヘアサロンをやりたいと思ったんです」と話したところ、「青空カットって私の夢だったんです。やってみたい」とおっしゃって、「その夢をかなえます。青空は無理ですが、海しか見えないというのはどうですか」と、意気投合して一緒にやることになりました。私は場所づくり、玉木さんがカットをする係です。日頃、私自身美容院の鏡はずっと見ていたいわけではないなと思っていて、この作品では鏡はいらない、海しか見えないというようにしようとなりました。玉木さんは 60 歳といってもトロピカルなお洋服も似あう、すごく若々しい方です。

〈ヘアサロン壽〉2019 年 ©MIYANAGA Aiko［写真：KIOKU Keizo］

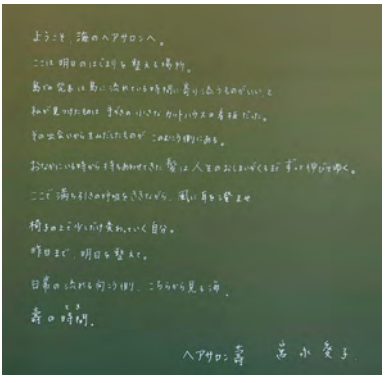
Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

会期が始まる前に、玉木さんから、「宮永さんの作品がないと困ります、作品をどこに置きますか」と連絡が来ました。「大丈夫、玉木さんと海とお客さんがまるごと作品だから」と説得しましたが、「来る人は、実際にものがないとどれが作品かわからない。海が見えるといっても、島の人には見慣れた風景で全然スペシャルじゃない」と心配されていました。それに対して私は「大丈夫、私のやりたいことはここに座ったお客さんが海をみながら海の話をすることだから」と言いました。海を見ながらおじいさんやおばあさんが、自分がお嫁にきたときの話や、自分が知っている海の話をする、そういう時間旅行みたいなことをしてほしい。ものだけじゃなくてそういう経験をすることも作品なのだと。

私が作品としたのは経験も含めた全体で、ヘアサロンで必要なもの以外は、島の寿荘という海の家のなかにあった麻雀のセットや、ガラスをただ組み合わせておいてあるだけです。この環境全て含めたものが作品です。1人しか入れないので1人しか体験できないのですが、入り口の看板に文章が書いてあります。

実際にやってみるとけっこう話が弾んだそうで、最初おばあさんが髪を切りながら話をされたときには、玉木さんからすぐに連絡がきました。「宮永さんが言っていたまったくその通りのことが起こって私は鳥肌がたちました」と。テレビの取材がたまたま入った時に、おばあさんがおじいさんとはじめて歩いた海の話をされたことで海を取材することになったり、お祭りでお孫さんの着物の着付けをすることを話したことで、お祭りの日のヘアサロンの様子をテレビが取材にきたり、旅が旅を呼ぶ、時間が次の時間を運んで来る、そういったことが起こりました。

あるおばあさんが髪を切りに来たときに、ここで見る満月がすばらしいとおっしゃったらしいです。それで玉木さんから私に連絡が入って、10月14日の日曜日に、特別に月夜にここで髪をカットする、予約制のツアーをやることになりました。ものが作品だと思っている方がもしもいらしたら、体験や、そのものがどうやってそこにいきついたのかということも作品の一部になるのだということを体感すると、芸術祭というものがもっと楽しくなるかと思います。このヘアサロンは予約ができず、たまたま空いていたら入れるというようになっているので、残念ながらフェリーの時間に追われている人には合わない作品となります。ぜひ時間に縛られない旅をおすすめします。



ヘアサロンの入り口に掲げられた宮永氏によるステイトメント

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

人を介して芸術に触れる、芸術を介して人に触れる

長谷川仁

長谷川です。よろしくお願いします。以前は社会学をやっていて、なんとなく今の道に入りました。

〈coins〉は最初につくった作品で、札幌駅の廊下にあります。様々な絶滅危惧種の動物のかたちをしていて、お金をどんどん入れていって貯まっていくと色がついてくる。貯まると動物の保護団体に募金されるという仕組みです。このときはまだ若く、具体的に社会に効くような行為が作品にできたらいいなということで制作しました。

〈エゾパズル〉は北海道の木でつくったオブジェで、人型に穴が開いていて入れるようになっていて、動物たちのなかで人間だけが外に出てしまっているというメッセージが込められています。空港の拡張工事の関係で今はありませんが、新千歳空港の国際線の乗り場のところにありました。

〈エゾパズル〉2010 年

〈オモチャの実〉は、妻有芸術祭に出したものです。かぼちゃにくまや車などおもちゃの型をはめて育てて、沢山おもちゃの実がなっているドームをつくって、みんなで最後「おもちゃ狩り」をしたいなと思ってつくりました。自然を相手にものをつくるのは、すぐ病気になるなど予想がつかず大変でした。最後やりたかったおもちゃ狩りができてよかったです。2 ヶ月くらい新潟に通ってつくったので集落の人ともすごく仲良くなって、未だにここからお米を買っています。

〈オモチャの実〉2012 年

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

〈タワラバシーン 2015〉は中標津の小学校で子供たちとつくった作品です。廃校になる前の最後の制作として、大人になったときに見返して思い出せる、タイムマシーンをつくることにしました。下に敷いている布がタイムマシーンという設定です。YouTube にアップしていて、大人になったときに見返すと、一瞬でその昔の記憶に行くことができる、つまり過去にすぐ行けるタイムマシーンだということにしました。

場所柄、家が牧場の子が多いのですが、ある 1 人の子の牧場でも撮影させてもらいました。一コマとっては動いてという繰り返しに子供達が飽きて、途中から布を頭にのせてただ歩く映像になります。生徒全員で、学校から牧場に歩いていきます。最後は、みんなどんな未来に向かっていくのかな、という感じで終わります。

〈プランクトン〉は、都内の豊海の小学校の子供達と海辺にプランクトンを捕まえにいって、観察して描いて、それを壁画にしたという作品です。横浜のみなとみらいの再開発で工事中の仮囲いにプランクトンの絵を描き、仮囲いが外れると中にその立体があるというかたちにしました。〈西竹ミラクルメリーゴーランド〉は、牧場で子供たちとスケッチしたものを、メリーゴーランドのように回して、布を吊るした壁に映して、町の人に見てもらいました。〈レジャーシート〉は、桜の下にミラーのレジャーシートを置いて、お花が二倍になるお花見をしてみたいと思ってつくりました。〈子供列車〉はメンテナンス用の、自転車で進む小さな列車を借りてつくっています。少しの労力ですごく進みます。〈大漁〉は、キナーレで展示したもので、大きなつりざおをぐっとあげると沢山の魚が釣れます。〈大笑い〉は、新しくできた小学校に何かをしたいという依頼があって、まだなにもない小学校に大笑いを届けたいということで、子供たちと大きな操り人形をつくりました。お披露目の最後に、頭の髪の毛がすぽんと抜けて、「やればできる」という紙が出て来て、そこが一番盛り上がりました。

〈大笑い〉2016 年

女木島での『小さなお店プロジェクト』〈的屋〉は、まず下見に行ったら、場所にキッチンがついていて、食に関係することをやってほしい空気がありました。もともと身体 1 つで行って、何か売るものをつくって商売してやろうと思っていたのですが、それだったら的屋ということにして、ものを売ったり食べ物を売ったりすれば、やってほしいこととやりたいことが合致すると思いました。たこ焼き屋さんと、かき氷屋、そしてくじひもです。女木島の「オオテ」という風よけ

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

の石垣にかこつけて、拾って来た石に絵を書いて、くじを引いて当たったものが風よけのお守りだとしています。夏からは、ボタンを押すとルーレットが回って、貝殻とか野良猫の写真に止まってラッキーアイテムを教えてくれる占いを始めました。来た人にアートをみるだけではなく、外に出て、色々散策するなかで島のいい所をみつけてほしいという思いがあってつくりました。

たこ焼きをつくってくれているボランティアのマスダさんがいなかったら、今回のプロジェクトは成立しませんでした。奥さんと一緒に、すごくいい売り込みで怒濤の売り上げを叩き出しました。なぜたこ焼きかというとたこが有名だからで、それに地元の漁師のおじさんと交渉してたこを譲ってもらって、高松に住んでいるマスダさんがつくって売るというのがセットになっています。初めは自分でたこを釣りに行って、売ろうかなと思っていましたが、なかなか釣れませんでした。夏は海水から塩をつくって、スイカ味のかき氷にかけて食べてもらっています。島猫をモデルにしたお面も売っています。

お守りづくりや絵を描いてもらうワークショップもやっています。猫のお面づくりでは猫を探して路地をいろいろ回ったり、石のお守りづくりでは海岸で何かを拾って来てつくってもらったり、アートを見に来たお客さんを外に連れ出せるよう仕掛けています。

〈的屋〉2019 年

人の集まる場を創造する

原倫太郎＋原游

原倫太郎（以下、原倫）｜今回デパート卓球という卓球台をつくらせていただきました。元々同じ名字で、結婚してからも同じです。普段は別々で活動していますが、芸術祭などの大きなイベントだと 2 人でやっています。芸術祭の作品を中心に紹介したいと思います。

〈影祭＜真夏の行進＞〉は 2012 年の大地の芸術祭での作品です。住民の方々に光をあて、できた影をなぞって、ペンキで塗るというワークショップを行って製作しました。影が永遠に残るという作品になっています。写真のおじいさんは残念ながら亡くなってしまったのですが、影が残っていることでそのおじいさんが存在したという痕跡がずっと残っています。残り続けるのは怖い、消してくれ

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

という声もありましたが、最終的には残して現在まであります。

原游｜十日町で写真のコンテストがあって、この作品の前で撮った写真が入賞したそうで、その後同じ構図で真似して撮る人が出てくるようになりました。それで、みんな不吉だと思っていたのが、いいねという感じになりました。

原倫｜〈影祭＜夏祭り万華鏡＞〉は、前の作品の近くの板金屋さんの倉庫で、住民の方やサポーターの方の影をとらせていただいたものです。一番左のウルトラマンのポーズは、テレビの取材に来たタレントの杉浦太陽さんの影で、本人が自分で描いてくれました。僕としてはウルトラマンというキャラクターが入ってしまうのは嫌でしたが、さすがに言えずに残っています。

原游｜影とその人の容姿の良し悪しは必ずしも一致せず、実際にはかっこよくない方が意外と影でみると素敵ということがあります。

〈影祭＜真夏の行進＞〉2012 年［提供：アートフロントギャラリー］

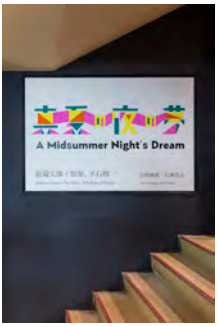
原倫｜ 2015 年の大地の芸術祭では旅館をまるごと作品にするという大きなプロジェクトをフラムさんにいただきました。元は夜逃げした旅館だったのでお化けが出るという話があって、盛塩があったり、お化け屋敷大会の会場になったりしていて、さらに地震もあって荒れていました。それを、サポーターの方々の力を借りて〈真夏の夜の夢〉というタイトルで作品化しました。廊下の〈真夏の雪玉〉という作品は、ここ 5 年つくっているボールが空中をはうようなシリーズで、世界でも有数の豪雪地帯である妻有で夏に雪玉が動くというコンセプトです。大広間での作品では、平石博一さんという現代音楽家の方の音楽がかかっています。

原游｜この部屋は変身をテーマにした作品で、大広間の作品では住民の方々や地元の高校生に変身してもらって、それを写真に撮って影の素材にしていたのですが、同じように、顔の変身をやってもらってそれをプリントして貼るというワークショップをやりました。

原倫｜ほかにも、ワークショップルームや、うちの猫を題材とした作品などがあります。香港の方が多かったのですが、沢山のサポーターの方に手伝ってもらいました。我々ができない縫製をやってもらったり、変装して影の素材になるようなポーズをとってもらったりしました。

　旅館は去年行ったら解体されてすっかりなくなっていました。まさに「夜の夢」で終わってしまったのです。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.



〈真夏の夜の夢〉2015 年［提供（中・右）：中川達彦］

原倫｜市原湖畔美術館というところで毎年開催している、子ども絵画展『君がみつけた市原』の会場構成を担当しました。単純に並べるだけでは面白くないので、市原の小湊鐵道を模して子供たちの絵をその中に飾ったり、絵の一部を拡大して草むらで遊んでいるようにしたり、絵の一部を散歩させながら絵画を見られるようにしたりしました。「動きの部屋」や「影の部屋」、音符のように絵が展示されている「音楽室」やワークショップルーム、そして最後に記念撮影のコーナーもあります。使ったのは高島屋の展示でも使われているハードな段ボールで、いい感じのテイストになっています。北川フラムさんが来られて、この展示を見て感動した、非常に良かったとおっしゃっていただき、次につながって北アルプス国際芸術祭に参加させていただきました。

〈ウォータービレッジ〉は『水遊び博覧会』でつくった全長 25 メートルの水路です。子供にスタイロフォームで船をつくってもらって、流して遊ぶというもので、我々は水路や周りの彫刻をつくりました。この水路をつくった経験を元に水の流れる卓球台というのを展示しています。子供たちは競争しながらつくってくれて、船は千隻の予定が、三千隻くらいつくることになりました。

原游｜同じ子が何度も、20 回くらいリピートしていましたね。

1.〈君がみつけた市原〉2017 年
2.〈ウォータービレッジ〉2019 年［提供：Osamu Nakamura］

原倫｜「日本昔話 Remix シリーズ」は、一度自動翻訳ソフトで英文にし、再び日本語に戻すと変な話になってしまうという昔話の絵本のシリーズです。たとえば竹取物語で、竹取の翁が「タケ盗品の老人」になったりとか、「光り輝く竹」が「ブリリアント・カットタケ」になったりします。本屋さんで特集していただいたのもあって、豊洲の紀伊国屋の単行本の月刊売り上げ 1 位になるなど、売れました。今年新作を出しまして、前はマガジンハウスから出版しましたが、新作『おむすびころりん』はクラウドファンディングでお金を集めて出しました。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

誰もが知っている話が奇妙に変わってしまうというものです。

北アルプス国際芸術祭では、〈はじまりの庭〉と題して、パチンコ屋さんを駅前のインフォメーションセンターとして作品化しました。芸術祭のグッズを売ったりサポーターの方々の決起集会などが開かれたりしました。市役所の一部分がここにきているので、オフィススペースもあります。パーテーションづくりや塗装、人工芝を敷く作業などを高校生と一緒にやりました。〈たゆたゆの家〉という作品も制作が決まっていて、急遽作品が 1 箇所から 2 箇所に、倍の仕事になってしまって、3 ヶ月滞在したのですが、朝 7 時から夜 2 時までずっと作業しているような状態でした。こんな経験は二度としたくないと思いましたが、いい経験になりました。瀬戸内ではこれに比べれば自分にとってはすごく楽でした。

〈はじまりの庭〉2017 年［提供：本郷毅史］

原倫｜小さなお店プロジェクトでは〈ピンポン・シー〉という作品を出しています。高島屋で展示しているのと同じ卓球台や、７人で遊べる卓球台などがあります。

原游｜〈ピンポン・シー〉ということで、海と卓球を合わせたようなデザインにしようと描きました。

原倫｜ひたすらつくり続けて、大きい卓球台は 1 週間くらいでできました。おかげさまで卓球が人気になって、さらに高松の商店街では〈アーケード卓球〉というのをつくりました。これは秋会期まで遊ぶことができます。

〈ピンポン・シー〉2019 年［提供：Keizo Kioku］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

「女木島」での制作を振り返って

女木島トークセッション

山本｜女木での作品制作の状況や、芸術祭に参加することに対しての思いなど、普段聞けないようなことを聞いていきたいと思います。

　まずは作品制作をした感想をお聞きしたいと思います。会場の建物は、もとは旅館と海の家が合体したような建物で、まだ荒れ果てた状況のうちから作品の構想を練り、少しずつ整備していきながら作品をつくっていったので、大変なこともあったと思います。

中里繪魯洲（以下、中里）｜作品を持ちこむかたちだったのであまり島での長期の制作はありませんでしたが、民宿といってもコンクリート建てで、30 年使われてなかった割にはしっかりしているなという印象でした。私の展示の場所は元々宴会場として使われていて、その中で制作していると当時はどんなことがあったのかなと時折考えることがありました。

山下｜私たちは、はじめは場所が指定されていなくて、高松で展開しているレンタサイクルのプランを出したら、それがお店につながるのではないかと女木島でやることになりました。しかしここのフェリーの時間は 17 時が最終で、観客の多くは泊まらずに日中作品を見て帰っていくという状況が分かって、ライトが光る夜間しか機能しないレンタサイクルをやるのは難しくなりました。そこではじめて何ができるだろうと考えて作品をつくることになったので、大変難題でした。さきほど宮永さんも言われていたように、アートとお店の機能がどういうつながりをもてるのか、作品に機能をもたせると不思議なことになりそうな感じがしました。最終的には「なタ書」さんという本当の古本屋さんに入っていただくことで、お店として機能できる段階になりましたが、そこまでいきつくまでが大変でとても考えさせられました。

宮永愛子（以下、宮永）｜私はさきほど話したので割愛させてもらいます。

長谷川仁（以下、長谷川）｜私の場合は最後の最後に、会期ぎりぎり 10 日前くらいでが一っとつくったので、つくる部分に関してはなるようにしかならないという思いでした。島を巡って色々と拾って来るという作業が楽しかったです。海岸にシロチドリという可愛い鳥がいて、卵に近づくと、親が卵を守るために自分が犠牲になろうとちょっと弱ったふりをする、擬傷行為というのを生で見ることができたのが嬉しかったです。

原游｜倫太郎くんが 1 ヶ月、私は 5 日間くらい滞在しました。私が島に向かう前に電話して状況を聞くと、珍しくちょっと寒いと言っていて、これは超極寒だと思って山登り用の服を揃えて行ったのですが、それでも寒いくらいで本当に大変でした。また、同じ部屋にみなさんと香港チームと、あと KOURYOU さんのチームという作家さんも泊まっていたのですが、その方がすごい情熱で、制作を朝の 3 時に起きてその部屋でされるというのがあって大変でした。あまり強く言えないタイプなのですが、次の日にちょっと無理ですと部屋を変えてもらいま

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

した。

原倫｜北アルプス芸術祭の制作があまりにも辛かったのですが、それに比べれば楽でした。ただ、後半どんどん人が増えてくるにつれて相部屋になってくるのですが、男の部屋は匂いがきつくなってきました。枕カバーが黄ばんでいるなど、気持ちが悪くなってきて、最後は無断で他の部屋に泊まっていました。ぼくもかなり年取って来たので共同生活が辛かったというのがありました。

山本｜すきま風が入ってきて、住むのに耐えられなさそうな建物だったので、倫太郎さんがさっき北アルプスに比べたらましだったと言っていて驚きました。仁さんも何日か滞在してらして、そのときはどうでしたか。一度車に避難されていましたよね。

長谷川｜部屋が暑くて、網戸がなくて蚊が沢山入って来るのが大変でしたね。

設営前の会場の様子［提供：アートフロントギャラリー］

山本｜ 2 つ目の質問は、瀬戸芸の全体的な印象です。数字上では前回に比べ、外国からのお客様やボランティアが増えています。あまり他の島を巡る時間もなかったかもしれませんが、気づいたことはありますか。

中里｜中国からのお客さんがすごく多いなと思いました。4 月にオープンして最初の数日間いましたが、言葉を聞いて、半分以上の方が中国系かなと思いました。

小林｜後から一般客として豊島などに行きましたが、豊島美術館は長蛇の列で、沢山の人数に驚きました。外国人が多いですね。

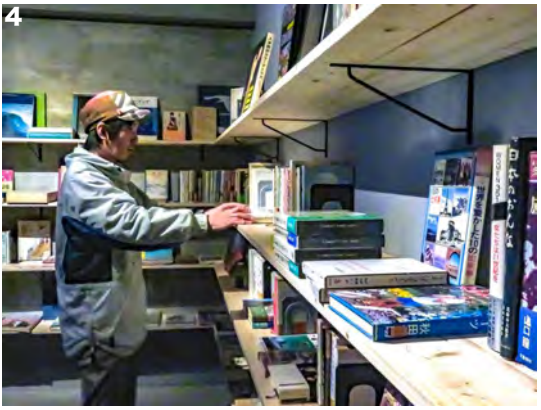
山本｜宮永さんの作品では髪を切ってくださる方から、外国のお客さんが沢山来て言葉が通じない、というのが何回かありましたね。

宮永｜はい。表現が難しいですが、瀬戸内国際芸術祭は人気があってたくさん人が来てくださるのは良いのですが、その人数の多さと島の感じが若干ずれつつあるのかなと思いました。たとえば、予定時刻の 10 分前でも、島のルールでは人がいっぱいになったらいってしまうので、フェリーが男木島で既に定員オーバーになってしまって、女木島で誰も乗れずに岸を離れてしまうことがありました。いらっしゃる方はそういうスケジュール感を心得ておくのがいいかなと思います。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

地方の小さな島で芸術祭をするということ

山本｜次に女木島での制作秘話をお聞きしたいです。作業風景の写真を少し紹介します。これは中里さんが外に作品を埋めているときで、これは長谷川さんのたこ焼き屋を手伝ってくださったボランティアのマスダさんです。仕事を引退されて時間があると言って、芸術祭のボランティアとしてたこ焼きを焼いたり部屋の掃除をしてくれたりかき氷をやったり沢山参加してくださいました。これが「なタ書」を運営している藤井さんです。宮永さんから説明がありましたが美容師をやってくださる玉木さん、お客さんとして髪を切られているのは女木島でカフェを営んでいらっしゃる方ですね。島の方やボランティアの方との交流が非常にあった作品制作になったと思うのですが、何か秘話がありますか。



1. 中里氏の作品設置風景
2. たこ焼きを焼くマスダさん（右側）
3. ヘアサロン壽
4.「なタ書」の店主の藤井さん
［提供：アートフロントギャラリー（写真 1,2）、瀬戸内国際芸術祭実行委員会（写真 3,4）］

宮永｜私は先ほど色々話したのですが、島にいる方、周りの方にすごくお世話になって、そういう方がいないとまったく成立しない芸術祭だなというのが第一印象でした。興味をもってくださった島の方と、周りのボランティアの方がいてこそ成立したなと。

長谷川｜ごはんが大変でした。最初は持ち込んで食べていたのですが、徐々にレストランやカフェをやっている方々に食べさせてもらうようになって充実してきました。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

原倫｜秘話とは違いますが、ぼくたちが卓球をやった理由は、日本の民宿や旅館には温泉卓球というのが文化としてあるので、もともと民宿だったところで卓球をやったら面白いのではないかと思ったからです。新潟の芸術祭は何回か参加させてもらったことがありますが、瀬戸内芸術祭は自分にとって物理的にも心理的にも遠いもので、参加できるなんて思ってもいませんでした。北川フラムさんに、代官山を歩いていたらばったり会って、こういうプロジェクトがあるからやってみないかと誘われたのです。そのときフラムさんからも卓球という話が出ました。他にも将棋屋さんや花屋さんという案もありましたが、将棋は得意じゃないとか、花に負けちゃうとかあって没になりまして、その点卓球はボールを使った作品をよくつくっているので面白いのではないかと。今回のデパート卓球につながりましたし、結果的に日本で 5 箇所卓球場をつくることになったので、自分にとって非常に良い経験でした。

山本｜卓球台のペンキを塗るときなど、ボランティアの方にたくさん参加してもらったと思いますが、そういった交流から作品が変わるということはありますか。ボランティアの方と一緒に作品をつくっていくというのはどうですか。

原倫｜ぼくは美術館でばんばん展覧会をやっているタイプじゃないですけど、それでも美術館やギャラリーの展覧会は 1 人でつくることが多いのに対して、芸術祭だと、サポーターの方の力を借りるので、1 日に 2-3 人、1 ヶ月だと 100 人近く入ってくださるのでここでしかできないことができます。自分の可能性を非常に大きくすることができるし、専門知識のあるサポーターの方もいらっしゃるので、単に単純作業ではなくて彼らの知恵を受けてつくることができ、非常に助かっています。

山本｜そういったタイプの作品は都市ではやりにくいのでしょうか。ボランティアを募って、地元の人との関わりを入れこんだ作品というのは都会ではなく地方だからできるということはありますか。

宮永｜都会だからできないというのはないと思いますが、もっている環境が違います。たとえば瀬戸内のもっている景色は都会にはない。自然とどういうふうに関わってつくるかということに対して圧倒的に強く、その景色を体験するだけでも行く価値がある、あの島々というのは日本のあの場所にしかない景色だと思います。人手という意味でいえば都会のほうがあるかもしれませんが、考え方というか体感のしかたで変わって来るかなと思います。

山本｜この質問をさせていただいたのは、今回、都市でのアートと、芸術祭などの地方のアートの違いをやりたいとフラムさんがおっしゃって、原さんの女木島という地方の展示を都会の高島屋さんでやらせていただいたという経緯があるためです。環境が違うというのももちろんあると思いますし、逆に場所が違っても条件は同じだというのもあるかもしれないですよね。

宮永｜便利さという点では、ものが手に入らないなどの困ったことはいっぱいありますね。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

原倫｜でも、女木島でもアマゾンで頼むと翌々日くらいには来て、日本のインフラってすごいなと思いました。

山本｜アマゾンでも港についてからは、手作業で台車にのせて島のおじちゃんが運んでいましたね。都会的な便利さもありながら、島らしいところもあるところは面白いですよね。

長谷川｜地方で芸術祭に参加すると、都会とは違って地元の方に色々お世話になりますね。ご飯を届けてくれたり、集会所に泊まったり。絶対に仲良くなりやすくて、芸術祭が終わってからも交流があるし、特に子どもとかを連れて行くとおばあちゃんにかわいがってもらえて、つくり手側にはそういう楽しみもあるなと思っています。

山下｜私は地方の芸術祭に参加するのは初めてでした。視察に行って、最終的に女木島のここの建物で見せるとなったとき、都市の芸術祭、たとえば横浜トリエンナーレでホワイトキューブの中で見せるのとはだいぶ違いがあるなと思いました。ホワイトキューブ用の作品とは最後のプレゼンテーションが違うので、つくるものが変わっていきます。一方でご当地アートのようになるのも嫌で、どこで出すにしても見せたい普遍的なものも自分の中にあって、ローカルとグローバルのバランスが難しかったです。

小林｜見に来るお客さんにとってもそうですが、瀬戸内でこの作品を出すというのは、ある程度瀬戸内の風景や風土が作品に前提条件としてついてくることだと思います。その瀬戸内だからその作品をつくるという気持ちが必ずしもつくり手になかったとしても、前提としてふまえなければいけないと思いました。たとえば前にアマゾン川を下るビデオ作品をつくったことがありますが、それを瀬戸内に出展するとおかしくなってしまうように、ここに出すのにそぐうものを出さなければいけない。でもそこでしか通じない作品というのもできれば避けたいと考えると、普遍性も一方で探さなくてはいけない。つまり瀬戸内にしかないけれどどこでも通じる話を追求するという、難しい選択が迫られます。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

司会者｜最後に１つ、このご時世なのでみなさんに聞きたいことがあります。芸術祭が色々な場所で開催されていて、それが地域の町おこしになっている一方で、あいちトリエンナーレの一件がありました。表現の自由に関して作家側の活動もさかんに行われて、いまいちど芸術祭ってなんだろうということを立ち返るタイミングになっている気がします。こうした状況のなかで、出展される側の作家さんたちが、これからの芸術祭はどうあってほしい、そしてどんなふうに芸術祭に関わっていきたいと考えているのか、一言ずつお聞かせいただければと。それで終わりにしたいなと思います。

宮永｜締めにしては暗いかも……（笑）。

司会｜今後のみなさんの展望も合わせて明るく終わっていただけるとありがたいです。

中里｜たしかに難しくなってはいますが、芸術祭というのは社会に開かれているのが基本であって、あらゆる問題が含まれているものだと思います。作家側と社会との開かれた場所があって、あらゆるものが対等に扱われるような環境が必要だと思います。

小林｜今話題になっているのは表現の自由に関することだと思いますが、自由というのは闘って勝ち取る類のものではなく、本来的にすべての存在がすでに持っているものだと思います。ですので、何も恐れる必要はなくて、たとえどういった状況になっても、奪い得ないものが自由ではないかと、楽観的と思われるかもしれませんが、そう思います。どうしても芸術祭になると町おこしなど行政とつながりプレッシャーがありますけれども。

宮永｜お二人が話されたことと同じような気持ちでいて、やりたい表現は自分でやりたいように責任をもってやる、もし伝えたい毒があっても、作品には暗に三枚下のようなところから出して、直接的に表現するのは私はやらないタイプです。私の作品が凄く美しく、毒なんてなさそうに見えても、よく考えたら三枚下くらいにあった、というくらい、作品というのは奥深いもので、表面を見て判断するようなものではなく、私もそのつもりでつくっています。読み解いていったり、考えていったりする、その過程がアートであり、作品だけでなくその周りの環境についても考えることもアートだと思います。そうした見方をみなさんにしていただけたらと願っていますし、そういう見方がもし日本に育っていないとしたら見方そのものが発展できるような場があると素敵だな、と思います。女木島は四季折々の変化のなかで面白いことはたくさんありましたが、一番印象に残っているのが中里さんも触れていた夏のお祭りの出来事です。2 年に 1 回男木島と女木島で交代で行われる、海の神様に届けるお祭りです。自分が島に関わって初めて島のことを知り、日本で起こっているさまざまな小さな出来事に自分が立ち向かえることがとてもありがたいなと体感しました。

長谷川｜瀬戸内では沢山お客さんがきて、次々作品を見て、フェリーの時間に追われて帰ってしまいますが、妻有だともっとゆっくり見ているような気がして、宮永さんが言ったように、もっと作品だけではなくてゆったり周りを見られるよ

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

うな仕組みになればいいのかなと思います。

原游｜芸術祭に行くと作品だけではなくて、作品以外のものも見えてきて、誰と行ったか、また周りの風景がすごく心に残るなと思います。あいちトリエンナーレも行きましたが、作品のなかに衝撃的なものがあったことよりも、ボランティアの人と話したり、ご飯をどこで食べようか考えたり、そういった全体が楽しいと感じました。芸術祭は沢山あるといいなと、個人的に楽しいなと思っています。

原倫｜芸術という分野がひとつのカテゴリーであると同時に、他のジャンル、たとえば食や政治といったジャンルに親和性があると思います。あいちトリエンナーレのようにクレームがきたらそれに従うというのではなくて、世のなかのいろいろな考えの人たちとうまく対話できればいいとは思います。観客の皆さんは作品を分刻みに見て忙しく回られていますが、つくっているほうは 1-2 ヶ月くらいの時間をかけて一生懸命つくっています。一部にアートを見るマナーがない人がいて、子ども達が卓球台をがんがんたたいて、引っ張ってはいけないところを引っ張っていたので、子どもに注意すると、親は知らんぷりして行ってしまうというのがありました。注意しても、作家だとは言わないので変なおじさんがきたというふうに見られてしまいました。壊されて直しに行ったこともありました。美術館だと 1 つ敷居が高いのでマナーはある程度守られますが、芸術祭だと敷居が低い分、なんでも有りと思っている方もいるのでので、それは 1 つの問題であるかなと思いました。

＊特記なき写真はすべて作家提供

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.